

Quantifier Floating in Japanese : From A Viewpoint of Active-Zone/Profile Discrepancy

尾谷昌則

大阪外国語大学 非常勤講師

HZT05753@nifty.com

1. はじめに

本論では、日本語の数量詞が許す2つのパターンについての考察を行う。次の2つの例文を見てほしい。

- (1) a. 三匹の子豚がいる。 ----- 連体数量詞
b. 子豚が三匹いる。 ----- 遊離数量詞

例文(1a)では数量詞「三匹」が連体格で用いられているので、これを連体数量詞と呼ぶが、この時の「三匹」は当然名詞扱いである。しかし(1b)のように、その「三匹」が名詞句の外側に単独で生起することも可能であるが、このような数量詞はこれまで遊離数量詞と呼ばれてきた。これまでの研究では、(1a)が(1b)へとパラフレーズ（移動変形？）できるということに着目する余り、(1b)の遊離した「三匹」も当然名詞であると盲目的に信じてしまい、その結果、(1b)のような位置に名詞であるはずの要素が単独で生起することが問題視されてきた。しかしこの「三匹」がもし副詞であれば、(1b)のような場所に生起することに何の問題もないはずである。そこで本発表では、遊離数量詞文に反映される話者の construal が連体数量詞文とは全く異なることを明らかにした上で、遊離数量詞はむしろ副詞であるという主張を試みる。¹

2. 連体数量詞と遊離数量詞の特性

2.1. 特定数量詞(specific Quantifier) vs. 不特定数量詞(non-specific Quantifier)

数量詞といっても様々あるわけであるが、加藤(1997)では、先行研究で主に取り扱われてきたものは(2a)や(3a)にあるような特定の数値を伴った数量詞ばかりであり、(2b)や(3b)にあるような数量詞が除外されてきたことを指摘した上で、前者を特定数量詞、後者を不特定数量詞と呼んで対等に扱っている。

- (2) a. 祐子は北陸自動車道を 250km 走り、休息をとった。
b. 祐子は北陸自動車道を かなり 走り、休息をとった。 加藤(1997:33)
- (3) a. 義雄はひとりで牛肉を 200g 食べた。
b. 義雄はひとりで牛肉を たくさん 食べた。 加藤(ibid.)

さらに加藤(ibid.)では、不特定数量詞には価値判断が含まれていることも指摘している。例えば、「たくさん」と言えば、基準値よりも多いという意味が含まれるというのである。これは本論にとっても極めて重要な意味を持つ。それは、いわゆる程度の副詞と呼ばれるものも一種の価値判断を含むからである。

- (4) a. その時、康夫は かなり 喜んだ。
b. 撤退したとはいえ、外にはまだ警備兵が かなり 残って居る。

例文(4a)の「かなり」は、いわゆる程度の副詞である。しかし(4b)では、同じ「かなり」でも単なる程度ではなく、警備兵の数量を表している。高水(1999)でも指摘されているように、量と程度の表現は全くことなるものではなく、むしろ共通の認知基盤に基づいているのである。さらに次の例を見てほしい。

- (5) a. 田中康夫知事は、県民からたくさんの支持を得ている。
b. 雄一は夏休みに友達とたくさん遊んだ。

「たくさん」という語は、程度というよりはむしろ数量に関する表現であるが、名詞的にも副詞的にも使用できる。例文(5a)では連体格で使用されていることから名詞扱いであることは疑いないが、(5b)になると誰がどう見ても「遊んだ」という動詞と意味関係を結んでいるとしか考えられず、副詞と言わざるを得ない。よって数量詞の中でも、少なくとも不特定数量詞は名詞のみならず副詞的な用法も持っていると言える。

2.2. 程度差や変化量を表す数量詞

数量詞といえば、先行研究で主に扱われてきたのは存在数量詞ばかりであった。しかし、ある者の存在を数量的に表す数量詞だけではなく、程度差や変化量を表す数量詞も存在する。(cf. 加藤 1997)

- (6) a. 私は彼女よりも年が { 1才 / 1つ } 下です。
b. 私は最近体重が { 1kg / 少し } 増えました。

例文(6a)のように、異なる2者間に存在する静的な差について述べるのが程度差だとすれば、変化量とは(6b)のように同一人物の異なる時点における動的な差について述べるものである。どちらも似たような用法であると言えよう。このような表現も数量に関する表現であるにもかかわらず、先行研究において取り上げられた例は極めて少ない。その理由は単純で、連体数量詞にパラフレーズするのが困難だからである。

- (7) a. * 私は彼女よりも { 1才 / 1つ } の年が下です。
b. * 私は最近 { 1kg / 少し } の体重が増えました。

これまでの先行研究は、連体数量詞が遊離数量詞へとパラフレーズできることにばかり目を奪われ、パラフレーズできない例を敢えて避けて通っていたように思われる。しかしパラフレーズできる例とは、たまたま2つの数量詞の共通点を抽出しているだけに過ぎない。それぞれの数量詞の本質を探るには、そのような共通点よりも、むしろパラフレーズが出来ない独特の用法にこそ目を向けるべきである。

3. 遊離数量詞の認知的機能

本節では、日本語の遊離数量詞が持つ認知的機能を2つ指摘する。1つは、遊離数量詞が行為(イベント)に付随して発生する活性領域(active-zone)の数量的側面を特定し言語化するという機能であり、もう1つは、話者の連続スキヤニング(sequential scanning)を反映する機能である。

3.1. 特定化された活性領域

活性領域とは、ある行為に決定的に関わっているにも拘わらず言語化されていない領域を指す。

- (8) 猫が犬に噛みついた。

上記例文(8)において、猫が犬のどの部分に噛みついたかということは明示化されていないが、誰も<犬>という個体の身体全てに噛みついたと解釈する者はおるまい。「噛みついた」のは、あくまでも身体の一部であり、その部分のことを活性領域と呼ぶ。この活性領域に関して、Langacker は本稿に重大な意味をもつ指摘を行っている。

- (9) “Although profile/active-zone discrepancies are natural (and even expected) from the standpoint of CG, there is often some communicative need or purpose for being specific in regard to the active zone.”
(Langacker 2000: 64)

通常なら活性領域として処理され、言語で明示化せずとも済む場合であっても、なんらかの理由で敢えて言語化することがあるのだ。ただし、言語化することで**余剰性**が生じる場合は文の容認度が下がるため、言語化するためにはそれなりの**情報価値**が必要とされる場合がある。例えば(10)の場合、*blink* という動詞の中に「目」という情報が含まれているために、そのまま *her eyes* を言語化するだけでは余情性が生じるので、*her big blue eyes* とすることで言語化に値するだけの情報価値を付加することで完全に容認可能となる。

- (10) a. She blinked.
b. ?She blinked her eyes.
c. She blinked her big blue eyes. (Langacker 1999:64, underline is mine)

このように、言語化された active-zone は **active-zone specified** とでも呼ぶことができる。(以下、本論では、これを **az.-spec.** と略す。) さて、日本語の active-zone について見てみよう。

- (11) a. 猫が犬 [az.-spec. のしっぽ] に噛みついた。
b. 私は先生に [az.-spec. 顔を／成績を／息子を] 誉められた。

括弧内にある表現は、普段なら active-zone として言語化されずとも済む表現であるが、言語化してもなんら容認度は変わらない。しかし、az.-spec.の情報価値が低い場合は、当然ながら容認度は下がる。

- (12) a. モノポリーは [az.-spec. ??遊ぶのが／??するのが] 楽しい。
b. 酒は [az.-spec. ??飲むのが] うまい。

ただし、例文(10)の場合と同じように、情報価値を付加してやれば容認文となる。

- (13) a. モノポリーは [az.-spec. 3人以上で遊ぶのが／みんなでするのが] 楽しい。
b. 酒は [az.-spec. 大勢で飲むのが／熱燗で飲むのが] うまい。

余剰性の回避によって容認度が増すという現象は、数量詞の場合にも存在する。奥津 (1996a,b) は、定の数量詞は遊離数量詞として使用できないと主張しているが、余剰性を回避すれば容認文になることもある。²

- (14) 昔ある所に三匹の子豚が住んでいました。
a. *ところがある日、その子豚が [az.-spec.三匹] 狼に食われてしまいました。
b. ところがある日、その子豚が [az.-spec.三匹とも／全部] 狼に食われてしまいました。

ここまでくればもう明白であると思うが、本節で主張することは、遊離数量詞も一種の az.-spec.として考えられないかということである。例えば次のような例文について考えてみよう。

(15) 北陸自動車道を走った。

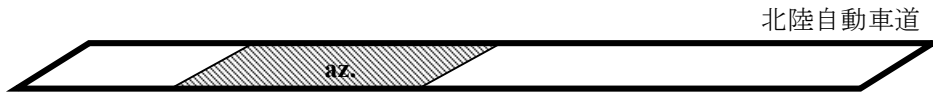


図 1

このように表現した場合に、常識的に考えて、北陸自動車道の端から端まで全て完走したと解釈する者はまずいないであろう。あくまでも、どこかのインターチェンジから入って目的地で降りたと解釈する方が自然である。とすれば、実際に走行した部分というのは、図 1 のように北陸自動車道の一部分である。つまり、言語化されているのは「北陸自動車道」であっても、実際に「走った」のは図 1 で網掛けされている部分だけであり、そこが active-zone として解釈されているのだ。ゆえに、その active-zone を言語で明示することも不可能ではない。

- (16) a. 北陸自動車道を [az.-spec.[?] どこか] 走った。
b. 北陸自動車道を [az.-spec. 少し／ちょっと／ずいぶん] 走った。
c. 北陸自動車道を [az.-spec. 長い間／しばらく／1時間] 走った。
d. 北陸自動車道を [az.-spec. 金沢から富山まで／100kmほど] 走った。

情報価値の少ない「どこか」では容認度は低いが、(16b.)のように価値判断が含まれる表現であれば情報価値も上がるので容認度も上がる。ただし、「少し」「ちょっと」「ずいぶん」などは時間と距離のどちらの解釈が曖昧になるので、それぞれ時間なら(16c.)、距離なら(16d.)のような表現をつかって active-zone を明示化できる。そして本稿が目指すのが、それぞれの最後に挙げた「1時間」や「100kmほど」である。これらは統語的位置から考えて遊離数量詞と呼んで差し支えないものであるが、上記の同一例文中に列挙した他の az.-spec.表現の一員となっている。しかも、例えば(16d.)の「100km」は、「北陸自動車道」そのものの距離ではなく、実際に「走った」部分の距離的な側面について叙述しているのであるから、名詞ではなくむしろ動詞と意味的な関係を結んでいるということになり、既存の品詞分類上、副詞として機能していることになる。つまり、連体数量詞とは機能が全く異なるのである。このことは、連体数量詞と遊離数量詞が共起可能であることから裏付けられる。例えばもし北陸自動車道の全長が 600km であると仮定すれば、

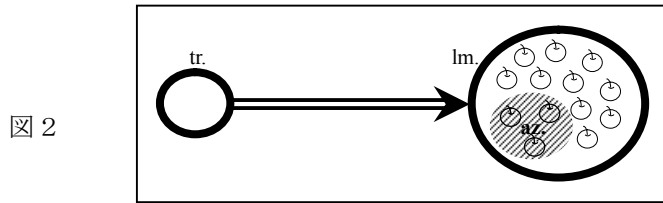
(17) 600kmの北陸自動車道を 100km走った。

という表現も可能である。当然ながら、全長 600km あるうちの 100km だけを走ったという解釈である。それぞれの数量詞が全く異なる部分について叙述しているのであるから、それらの本質的な機能も全く異なるものであると言えよう。³ 以上、この節で主張してきたことをまとめると、以下のようなになる。

遊離数量詞は、動詞で表される行為（もしくはイベント）において必然的に生じる az. を数量的に言語で明示化したものであり、つまり az.-spec.の一種である。ゆえに、非修飾名詞よりもむしろ動詞と強い意味的な関係を結んでおり、副詞的な機能を果たしている。

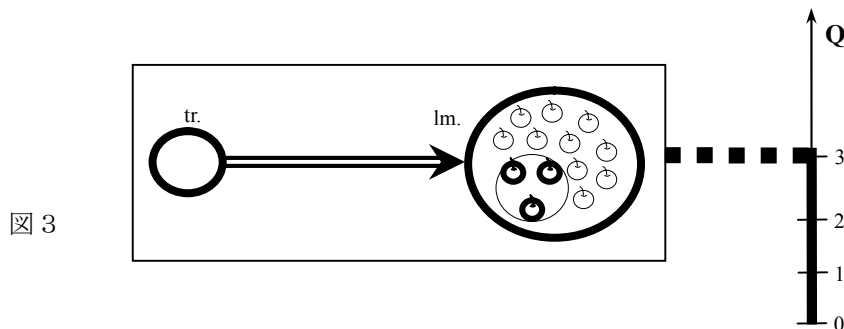
最後にもう 1つの例を考えてみよう。今度は時間でも距離でもなく、個数である。以下に挙げる例文(18)のような発話があった場合、誰も青果店で売られていたリンゴを全て健二が買い占めたという解釈はしないであろう。青果店には当然 10個や 20個くらいのリンゴは置いてあり、常識的に考えれば、そのうちのいくつかだけを買ったという解釈である。ゆえに、図 2のように、実際にプロファイルされている「リンゴ」の中でも、特に健二が買ったリンゴは active-zone として解釈されている。

(18) 健二は青果店で リンゴを 買った。



勿論、active-zone として解釈されている健二が実際に買ったリンゴの数を az.-spec.として言語化することも可能である。例えば買った数が「3個」だとしたら、遊離数量詞を使って以下のような表現になる。

(19) 健二は青果店で リンゴを [az.-spec. 3個] 買った。



ただ、(19)のような「3個」は、副詞として機能していると言っても多少不自然に感じる話者も多いはずである。先ほどの「1時間」や「100km」とは違い、個数はどうしても副詞らしさに欠けるのは否めず、同じ数量表現の中にも、副詞らしさと名詞らしさでグレイディエンスを認める必要がある。⁴

3.2. 連続認知(sequential scanning)を反映する遊離数量詞

前節では、オーソドックスに意味と修飾関係の観点から遊離数量詞の副詞性を議論してきたわけであるが、本節では、認知言語学的な観点から以下の2点を主張することで、遊離数量詞が副詞として機能していることを主張してゆく。

連体数量詞は、**summary scanning** (一括スキヤニング) を反映しており、遊離数量詞は、**sequential scanning** (連続スキヤニング) を反映している。

そもそも、遊離数量詞の機能が連続スキヤニングを反映するためのものであるからといって、それがなぜ副詞性の高さに結びつくのかという疑問を感じられるかもしれないので、先にそれについて説明しておこう。Langacker(1987: 144-6)では、連続スキヤニングと一括スキヤニングの違いを説明するために、以下のような例文のペアを挙げている。

- (20) a. He fell.
b. He took a fall.

例文(20a.)では、落ちてゆく process が連続的にスキャンされたことを反映しているが (図4(A)参照)、一方

で(20b.)は同じイベントを名詞で表現することによって process の側面が捨象され、一括スキニングで認知されたことを反映している (図 4 (B)参照)。

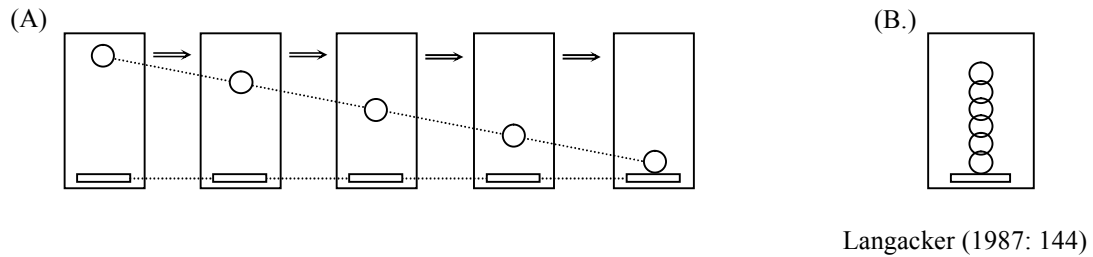


図 4

ここで重要なのは、例文(20)に見られるように、一括スキニングは名詞で言語化され、連続スキニングは動詞で言語化されているという事実である。

“Schematically, then, a noun profiles a thing (the result of conceptual reification), while a verb designates a process (a relationship scanned sequentially in its temporal evolution).” (Langacker 1999:22)

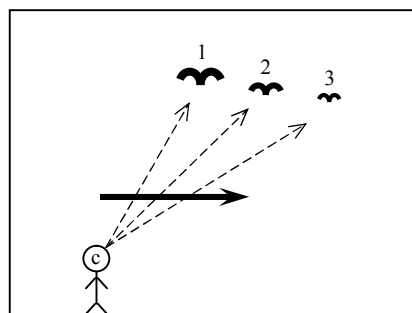
認知文法における動詞は、特殊な場合を除けば、時間軸上に位置づけられる process をプロファイルするものであり、そこには必然的に時間の流れが伴う。故に動詞は連続スキニングと相性がよいのは当然の帰結なのである。

さて、それでは下の(21)のような例について考えてみよう。この例文は、アイコン性が言語に反映された例として山梨(1995:130)で紹介されている例文であるが、注目してほしいのは、ここに遊離数量詞が使われているということである。

- (21) a. あ、鳥が一羽、二羽、三羽、飛んできた！ (山梨 1995 : 130)
 b. *あ、一羽の、二羽の、三羽の鳥が 飛んできた！

この例文は、目の前の空に鳥が飛んでいる場面を描写したものであるが、話者は鳥の数を1つ1つ数えながら状況を描写している。この時、話者が行っているのはまさしく連続スキャンであるが (下図参照)、そのような認知を反映する表現として、(21b.)のような連体数量詞ではなく、(21a.)のように遊離数量詞が用いられているのである。

図 5



何かの事象をリアルタイムで描写する場合、すべてを同時に認知・言語化することは不可能であるため、そこにはどうしても認知・言語化の<順序>が生じてしまう。何らかの物体とその物体の数量的側面を認知する場合、まず最初にその物体が何であるかという identification の認知が優先され、その物体の数量的側面(つまり個数)が後回しにされるということは、人間の認知活動として至極当然なことであるし、たとえ数量的側面の認知が優先されたとしても、数量を数え終わるよりも前に問題の物体に対する identification の方が完

了してしまうであろう。なぜなら、2つや3つといった小さい数でない限り、ものの<個数>などは、一瞬で全て認知するのは困難だからである。しかも、そもそも<数>というものは、ほとんどの場合は「1」から始まり、「2」、「3」、……、という具合に順番かつ連続的に認知ゆく場合が多く、例文(21a)でも同様の認知が為されているのである。このような連続的にスキャンしてゆく場合は、(21a.)に見られるように遊離数量詞と相性が良く、連体数量詞を用いることはできない。連体数量詞を用いる場合には、すでに1つずつ数えるというプロセス（連続スキャンニング）が終了した結果としての一括スキャンニングを言語化する時である。

(22) あ、三羽の鳥が飛んできた！

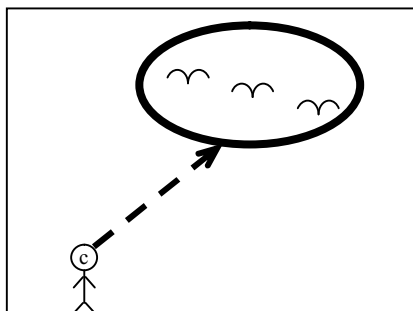


図 6

このようなスキャンニングの違いは、次のような表現にも見られる。(23a.)は眠れないときによく使われる台詞であるが、これは羊が1匹ずつ連続して出現するという状況なので、連続スキャンニングを反映する遊離数量詞が用いられる。連体数量詞を用いた(23b.)も非文ではないが、これだと最初に1匹の羊、次は2匹の羊、そして次は3匹の羊という具合に、1匹ずつ増えた集団が次々に出てくるという意味になってしまう。これは連体数量詞が一括スキャンニングを反映しているからであろう。

- (23) a. 羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹……
 b. # 一匹の羊、二匹の羊、三匹の羊……
- (24) a. 延長戦を5分戦ったところで雨が降ってきた。
 b. # 5分の延長戦を戦ったところで雨が降ってきた。

例文(24a.)では、5分以上ある延長戦が1分、2分、3分と過ぎて行き、途中の5分の時点でさしかかった所で雨が降ってきたという解釈であるから、1分から5分までの連続スキャンニングが感じられるが、(24b.)では最初から延長戦が5分と決まっていたという解釈であるから、延長戦に関してはすでに一括スキャンニングが為されていることになる。

4. 遊離数量詞の副詞性

最後に、本稿の最終目的である遊離数量詞の副詞性について論じる。逆説的な言い方になるが、数量詞の基本的性質が名詞であることは筆者も認めるところである。というのも、以下に示すように連体格で用いることができるからである。

- (25) a. 1冊の本
 b. 2リットルの烏龍茶
 c. 3時間のドライブ
 d. 400mの全力疾走

しかし、名詞としての用法があるからといって、それ以外の用法が存在しないとは言えない。数量詞には副

これは、不特定数量詞には価値判断が含まれていることから、一種の<程度の副詞>として機能するためと思われる。例文(31)の場合、ロシア語をどれだけ勉強したのかについて述べているが、それが量的なものであるか、それとも時間的なものか、それともロシア語の習得の程度についてなのか、はっきりと判別するのは困難である。⁸

遊離数量詞が程度の副詞として機能していることは、「どれくらい」という程度を問う疑問文の答えとして使用できることから明らかであろう。

(32) どれくらい飲んだの？

- a. {**10本くらいのビール/ビールを10本くらい} かな。
- b. {たくさん/ものすごく} 飲んだよ。
- c. {たくさん/ほんのちょっと} だよ。

5. 最後に

本論では、遊離数量詞の文法的地位について論じてきた。遊離数量詞は、(1)動詞が表す行為によって生じる *az* を数量的に特定している、(2) *sequential scanning* を反映している、(3)スケール概念を基盤としている、(4)語順がかなり自由である、(5)「どれくらい」という程度を問う疑問文の応答文に使用される、などの理由から程度の副詞の一種として機能していることを見てきた。中でも、特定数量詞に比べると不特定数量詞の方が副詞性が高いことも上で見た通りである。時の副詞も含めて、数量を表す名詞が副詞として転用できる理由は、スケール概念に基づいた認知プロセスを含む故である。本論では、数量詞の中には名詞だけではなく副詞的に機能するものもあることを指摘したわけだが、単に2つの用法が存在するというだけでは不十分だと思われる。モジュール的発想から未だに脱却できない統語論的観点のみから分析するならば、品詞カテゴリーというものはレキシコンの根幹を為す概念であるから、それがクリアカットに規定できないようなカテゴリーでは困るのかもしれないが、現実はそのように綺麗に割り切れるものばかりではない。品詞とは、人間が言語を分析するために作り出したグルーピング方法の一種であり、言語の発生と同時に発生した物でもなければ、言語が発生する前から存在していた大前提でもないということを我々は忘れてはならない。Langacker(1990)でも指摘されているように、品詞カテゴリー同士の境界線とはファジーなものである。本論は、そのファジーさを支えていると思われる人間の認知活動もしくは認知的基盤の一隅に光を当てただけに過ぎないのだということを明記して、最後の言葉としたい。

¹ 加藤(2000)は、助詞省略との平行性という観点から遊離数量詞を副詞として結論づけており、基本的には本論もそれを支持するものである。

² ただし、奥津(1969:48)では、数量詞の定義として「数詞(*numeral*)」と「助数詞(*classifier*)」の組み合わせであるとしているので、余分な語彙的要素を伴う「三匹とも」や「三匹全部」などは数量詞ではないから反例にはならないと奥津は述べるかもしれない。

³ 修飾する側面が異なれば、一見矛盾するような語句でも共起することが可能であるということは、すでに山梨(1995)が以下のような例文を挙げて指摘している。

(i) <美しい>バラが<醜く>咲いている。(山梨 1995: 176)

⁴ 個数ではないが、人数を表す数量詞が副詞(おそらくは様態の副詞の一種)として使用されている例なら

ば以下のようなものが挙げられるであろう。また、(iii)に挙げるように、取り立て詞を伴うと一層副詞性が増して自然な表現になる。

(i) 十三四の女の子が一人石垣にもたれて、毛糸を編んでいた。(川端康成「雪国」: 75)

(ii) 笑瓶さんはその様子を一人ぼつんと眺めていました。(「ダウンタウンDX」から)

(iii) 放課後の教室で、花子が {一人／一人寂しく／一人だけ} 泣いていた。

⁵ 数量詞を無助詞で用いると副詞扱いになるということは、加藤(2000)でも指摘されている。

⁶ スケール概念を含む語が必ず副詞になるわけではなく、sequential scanning が反映されなければ名詞になる。

⁷ もちろん、「前」などの表現をつけると、助詞と共起することも可能となる。

(i) 彼は3年前 {に／φ} パリで千佳と会った。

⁸ 高水(1999)は、量と程度の表現にはっきりとした境界性を見いだすのが困難であるとして、「量・程度表現」というカテゴリーを設定する必要性について論じている。

参考文献

井上和子 1978. 『日本語の文法規則』 東京：大修館書店

神尾昭雄 1977. 「数量詞のシンタクスー日本語の変形をめぐる論議への一資料」 『言語』 Vol. 6, No. 8, pp. 83-91.

加藤重広 1997. 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」 『富山大学人文学部紀要』 No.26, pp.31-64.

加藤鉦三 2000. 「日本語の数量詞遊離と助詞省略について」 『日本言語学会第121回大会 予稿集』 pp.1-6.

国広哲弥 1980. 『日英語比較講座 第二巻 文法』 東京：大修館書店

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

————— 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

————— 1999. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistic Research 14.) Berlin / New York: Mouton de Gruyter.

尾谷昌則 1999. 「Active-Zone としての数量詞遊離」 第2回認知言語学フォーラムワークショップ発表資料

————— 2000. 「遊離数量詞に反映される認知ストラテジー」 『言語科学論集』 Vol.6, pp.66-101.

奥津敬一郎 1969. 「数量的表現の文法」 『日本語教育』 Vol.14.

————— 1974. 『生成日本文法論』 東京：大修館書店.

————— 1996a. 「連体即連用 数量詞移動 その一」 『日本語学』 Vol.15, No.1, pp.112-119.

————— 1996b. 「連体即連用 数量詞移動 その二」 『日本語学』 Vol.15, No.2, pp.95-105.

高水 徹 1999. 「日本語の量・程度表現に関する認知言語学的分析」 京都大学修士論文

山梨正明 1995. 『認知文法論』 東京：ひつじ書房

————— 2000. 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版